

本土側とは形態や生態が異なる隠岐諸島の昆虫類について

林 成多（ホシザキ野生生物研究所）

隠岐諸島は日本海の山陰沖に位置する群島である。山陰本土とは海水準の変動により陸続きとなった時代もあるため、島としての隔離期間が短い。そのため、固有の昆虫（種や亜種）は少なく、大半は本土と同じ昆虫が生息している。

隠岐固有の昆虫は地域的に体の形や模様に変異が大きい種であることが多く、隠岐だけでなく日本国内でいくつかの種や亜種に分類されている。一般に飛べない種や餌が特殊なために容易に移動出来ない種などが相当する。飛べない昆虫では甲虫のオキオサムシ（ダイセンオサムシの隠岐産亜種）やオキマイマイカブリ（マイマイカブリの隠岐産亜種）などが代表であり、餌（食草）が特殊である例としては蝶のホシミスジ隠岐亜種がいる。

隠岐に生息する昆虫の多くは本土でもみられる種であるが、その生息環境や生息状況に注目すると興味深い種がいくつかいる。例えば、ヒラタドロムシという水生昆虫は、本土側では主に石が多い大きな川の本流に生息している。しかし、隠岐にすむヒラタドロムシは、隠岐には大きな川がないため、山地溪流など本土側では考えられないような環境に生息している。また、隠岐の水田ではオンブバッタばかりでコバネイナゴやハネナガイナゴはみられない。分布しているのにも関わらず水田に生息しないということは、本土側の生息状況からみれば実に不思議な現象である。島という限られた環境を利用していることがこれらの現象の背景となっているが、生態学的な検討はこれからの課題である。



オキオサムシ（固有亜種；左）とオキアオハムシダマシ（固有種；右）